

巻頭言

何も知らないということを知っている

佐長 健司*

I Know That I Know Nothing

Takeshi SANAGA

しかし、彼は何も知らないのに、何かを知っていると信じており、これに反して私は、何も知りたがらないが、知っているとも思っていないからである。されば私は、少なくとも自ら知らぬことを知っているとは思っていないかぎりにおいて、あの男よりも智慧の上で少しばかり優っているらしく思われる(プラトン, 1964, 『ソクラテスの弁明・クリトン』(訳・久保勉) 岩波書店, p.21)。

上野景三先生と中島秀明先生が退職される。学校教育学研究科としては、たいへん残念だが、お別れしなければならない。

上野先生は、社会教育学・生涯学習論の第一人者であり、日本公民館学会の会長も務められている。また、本学においては長く教授として教育研究に邁進するとともに、文化教育学部附属小学校長、及び文化教育学部長・教育学研究科長の重責を果たされた。発揮されるリーダーシップには、多くが厚い信頼を寄せていた。

中島先生は、佐賀県の高等学校教員に奉職された後、佐賀県教育委員会において教職員課の主幹、課長、さらには副教育長という要職を歴任された。佐賀県教育委員会の退職後に、実務家教員として本研究科にお迎えした。教育行政について熟知し、全国的に知られるまでに、佐賀大学と佐賀県教育委員会との連携を強力に推進された。

さらに、お二方も、本研究科の創設に尽力されたこともある。また、創設後は副研究科長として、わたしたちをリードしてくださった。

さて、正統的周辺参加論によれば、学習とは共

同体への参加である。参加は、新参者としての責任の軽い容易な活動から、古参者として共同体全体にかかわる重要な役割を担うように軌跡を描く。

参加においては、新参者と古参者との間にはコンフリクトが生じる。新参者は、憧れや目標の対象である古参者のようになり得たならば、古参者を追い出すように、その立場に移る。一方、古参者は、新参者にその立場を譲らなければならないときがくるにもかかわらず、共同体の維持と発展のために、新参者を育てなければならない。すなわち、互いが互いを必要とするのは、互いが互いを必要としなくなるためなのである。

しかし、見方を変えると、古参者は実質的に存在してはならない。なぜなら、共同体は常に変化するためである。変化する共同体においては、誰もが新参者でなければならない。十分に学んだので何でも知っているなどと思う、愚かな古参者は変化に対応できない。そのため、そのような古参者は共同体の存続を危うくするのである。

わたしたちは、お二方に代わるように、古参者へと移行するだろうが、これまで同様に新参者として学び続けなければならない。何も知らないということを知っている、と自覚しなければならない。そう自覚すればこそ、教育研究、組織運営、及び地域貢献について学び続け、本研究科の維持と発展に貢献できる。そうすることが、わたしたちを導いてくださった、お二方に深い謝意を示し、その跡を継ぐことになるのではないかと。

最後になったが、上野先生と中島先生のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

(2020年1月31日 受理)

*佐賀大学大学院学校教育学研究科